

## ● 会議報告

### 特別講演

講演題目：身体性を失った後の生き方 アバターロボット構想

講師：吉藤 オリイ 氏（株式会社オリイ研究所代表取締役所長・デジタルハリウッド大学大学院 特任教授）

#### 講演内容

積極的に活動されている方のため、映像を中心に具体的な説明が多かった。ここでは講演で主に話された OriHime についてとりあげる。



吉藤氏が今の活動を始めることとなった原体験は、中学生時代の不登校に由来するそうだ。不登校の間2週間一言も会話をしなかったことから、うまく日本語を話せなくなったとのこと。その際の経験から、寂しさや孤独感と言ったストレスと、生きがいの低下をどう解消するかを課題とした。

その後、開発されたのが「OriHime」と呼ばれるコミュニケーションロボットである。

OriHime は、高さ 23cm、重さ 660g と、ペットボトルよりひとまわり大きいくらいで、持ち運びがしやすそうである。当日も会場にも持ち込まれ、講演台の上で展示されていた。

通常ロボットと言われると両手両足があり独立独歩する人間型ロボットを思い出すが、OriHime はコミュニケーションのみに特化したロボットのため、足や複雑に動く腕といったものは無い。その代わりに、遠隔操作で動かせる大きな頭と大きな腕が取り付けられている。ユーザは、頭に埋め込まれたカメラの映像を見ながら頭や大きな腕を遠隔操作で動かし、ジェスチャーで応えたり、ジェスチャーを加えながらロボットを通じて遠隔地に話しかけることができる。これにより単なるビデオ通信を超えた、そこに「居た、参加した」感覚を共有できるとのこと。



OriHime を紹介する吉藤氏

ジェスチャーに使われる大きな腕は、共に開発をした番田によるアイデアだと言う。番田は交通事故による障害で首から下しか動かせず、PC は顎で操作していたそうだ。おそらく多くの人々がコミュニケーションというと、音声や映像で充分と思うだろう。しかし腕が動かせない番田にとって、腕が動

く事は重要なコミュニケーションであるとのこと。その結果、現在のような大きな腕を持つスタイルになつたと説明があつた。コミュニケーションを促進するためには、映像や音声を高品位にするだけでなく、付け加えるべき事がまだまだあることを示唆している。

この身振りを交えたコミュニケーションは、そこに居たり、参加した印象を同じ空間の人々に持たせる。なので友だちと旅行したくてもできない時、OriHimeを旅行に連れていき一緒に楽しむことで、お互いがそこに存在した記憶を共有できる。後であのときはああだったと話せる事は、撮影してきた写真や映像をただ見るのとは違う関係を築けるのではないだろうか。

こうした関係を築く例として、難病のALSにより卒業式への参加が困難になった教頭先生が、OriHimeで卒業式に参加する事例が紹介された。卒業証書が授与されるたびにOriHimeが遠隔操作で拍手をするのだが、これは向こう側に人がいて拍手をさせていることへの理解があれば、一緒に卒業式に参加したとの思いが共有されただろう。

吉藤氏の説明によると、ALSの患者がやがて呼吸ができなくなる際、呼吸器の装着を選択するのは約3割とのこと。様々な事情や葛藤があることが推測され一概には言えないが、そこに自分が居るという認識をしてもらえ、社会との接点や帰属意識を持ち続けることができるという選択肢があるのなら、この3割の数字は変化するのではないだろうかと感じた。

講演全体では吉藤の目指す「寂しさ、孤独感」の解消は、増加し続ける独居老人や育児中のテレワークといった市場をも見据え、広い意味での「福祉」と「工学」をカジュアルに結びつけたビジョンを示した。あいにく講演では語られなかったが、近年のAI普及による仕事の減少が予測されている中、ベーシックインカムといった新たな制度を見据え、お金を払って働くというビジョンもお持ちのようで、人工知能のさらに先はどのような社会であるべきかを考える上でも貴重な機会となった。

(報告者：曾我部 哲也 中京大学 工学部 メディア工学科 准教授)